年度 /AY	2024 年度実施
研究科 /Graduate School	文学研究科
課程 /Program	博士課程　前期課程
専攻・コース等 /Major, Course	人文学専攻　教育人間学専修
入試方式 /Admission Method	一般入学試験、社会人入学試験、外国人留学生入学試験
試験科目 /Exam Subject	専門科目
実施日（試験日） /Exam Date	2025 年 2 月 8 日

解答又は解答例及び出題意図
Answer or example of answer
Intent of the question
（試験問題自体を公開しない場合はその理由）
（Reasons for not publishing exam questions）

問Ⅰ.【人間形成領域】

１．＜採点時の観点と出題意図＞

人間形成領域で研究を行う上で最低限知っておくべき学問的背景について十分な知識と理解を有するか否かを評価の観点とし、解答を通してそれらの習熟度を評価することを意図して出題した。

２．＜解答例＞

（１）挫折：ボルノーをはじめとする、実存主義の教育学に対する積極的な影響を重視する論者は、我々に人間的な生の非連続性を自覚させ、「出会い」「覚醒」「冒険」といった、危機的かつ画期的な出来事（契機）のもつ非連続的な形の人間形成に開眼させたが、「挫折」もまた、こうした重要な契機の一つと目されている。

（２）プラグマティズム：19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて主にアメリカで発生し展開された、行動・実践を重視する思想学派である。この学派を代表する思想家として、C.S.パース、W.ジェイムズ、G.H.ミード、J.デューイなどが知られる。

（３）メタモルフォーゼ：変容・変身・転生を意味するドイツ語だが、多種多様に見られる生物進化は原型が絶えず変形（メタモルフォーゼ）したものと捉え、植物の原型というべき「原植物」を探し求めたゲーテによる形態学的研究が有名である。この用語は植物のみならず生命全体にわたって使用することが可能であり、特に、人間の変容を多種多様な動植物やモノとの関わりの中で考察するのに有効である。

問Ⅱ【臨床教育領域】

１．＜採点時の観点と出題意図＞

臨床教育領域で研究を行う上で最低限知っておくべき学問的背景について、十分な知識と理解を有するか否かを評価の観点とした。文学研究科の求める学生像（アドミッション・ポリシー）を踏まえ、本領域の歴史的背景、課題、および現状に関する十分な知識と

理解を有するか否かについて、解答を通して評価することを意図して出題した。

２．＜解答例＞
（１）Society 5.0：狩猟社会（Society 1.0)、農耕社会（同 2.0)、工業社会（同 3.0)、情報化社会（同 4.0）に続く社会のことで、具体的には「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会と」と定義される。
（２）学びの多様化学校：不登校児童に特別の教育課程を実施する学校を指す。かつては「不登校特例校」と称されていたが、2023 年 3 月に発表された「COCOLO プラン」より名称が変更となった。
（３）チーム学校：2015 年 12 月の中教審答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」で示された考え方。チーム学校の効果としては、教員同士が連携して新しい教育課題に組織的に対応すること、外部スタッフの参画による教員の負担軽減と専門業務の充実、専門スタッフによるいじめや不登校など多様化する課題への対応の充実などが効果として期待される。
（４）学力の三要素：学校教育法第 30 条第 2 項における学力の定義で、基礎的な知識および技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度の三つを指す。
（５）教育 DX：デジタルトランスフォーメーション（DX）は、デジタル技術により業務や組織を変革することを指すが、教育 DX は、データによる知見の共有、基盤的ツールの開発など様々な取り組みで新しい教育価値を創出することを意味し、ICT を活用した教育改革のことである。

問 III【心理健康領域】
＜採点時の観点と出題意図＞
1．認知科学および心理学における基本的な用語の説明を求めた。言語遮蔽効果および限定合理性は個別の心理的効果や特徴の説明、自然言語処理は近年の人工知能技術にも関連する基礎知識、行動主義心理学および生態学的妥当性は心理学の歴史的な発展の観点も踏まえ心理学の種類や研究の妥当性の検討についての説明が望まれる。

２．心理統計の基礎的な知識をはかるための問題。標本分布が、母集団からサンプリングされた標本集団の標本統計量に関する確率分布である点を述べれば良い。

年度 /AY	2024 年度実施
研究科 /Graduate School	文学研究科
課程 /Program	博士課程　後期課程
専攻・コース等 /Major, Course	人文学専攻　教育人間学専修
入試方式 /Admission Method	一般入学試験
試験科目 /Exam Subject	外国語科目（英語）
実施日（試験日） /Exam Date	2025 年 2 月 8 日

解答又は解答例及び出題意図
Answer or example of answer
Intent of the question
（試験問題自体を公開しない場合はその理由）
（Reasons for not publishing exam questions）

＜解答例＞

問１．小学校に入学した 38 名中、5 名が中途退学し、33 名が卒業した。そのうち、3 名を除き、30 名が中学校に入学した。中学では 9 名は中退し、21 名が卒業した。そのうち 17 名が留年なしで進級し、4 名には留年期間があった。高等学校には 11 名が入学し、10 名が卒業した。さらに 5 名が大学に入学し、3 名が卒業した。大学へは進学しなかった 5 名のうち、3 名は高校を休学し、数年後に復学して卒業の資格を取った。

問２．2000 年から 2018 年までに筆者の行った調査結果では、小学校に通学していた男の子たちの、その後の進路について 8 通りがある。

１．小学校を途中退学して、ダッカに移住する。
２．小学校卒業後、ダッカに移住し、村へ戻り、結婚する。
３．小学校卒業後、ダッカに移住し、村へ戻り、中学へ進学する。
４．小学校卒業後、しばらく時間が経ってから、ダッカに移住する。
５．小学校卒業後、中学へ進学し、中退してしばらく経ってから、ダッカに移住する。
６．小学校卒業後、中学へ進学し、中等教育修了認定を得た後、ダッカに移住する。
７．小学校卒業後、中学へ進学し、中等教育修了認定を得た後、高等教育機関（大学など）に進学し、高等教育機関修了認定を得た後、ダッカに移住する。
８．小学校卒業後、中学へ進学し、中等教育修了認定を得た後、高等教育機関（大学など）に進学し、高等教育機関修了認定を得た後、学士号を取得する。

問３．1.4.1 のシャムスのライフストーリーを記述する。男の子ばかり 7 人兄弟の末っ子で、シャムスが小学校に入学する時には、農夫の父親は高齢のために仕事を止めていた。彼はクラスで一番成績が良かったが、両親に経済的余裕がないので、卒業した後、上の学校に進むことはできないだろうと考えていた。だが、第 8 学年の時、2 番目の兄が都会に移住して働き、家に送金してくれるようになったので、チャムスは第 12 学年まで学校に

通い続けることができ、中等教育修了認定（HSC）の試験に合格して、兄弟たちの中で一番高い学歴を持つことになった。HSC に合格した後、進学はやめてダッカに移住して働くことにした。親戚の縁故で仕事を見つけて、ある工場の品質チェック部門で働き、高給を得るようになって、親戚の家族と一緒に都会暮らしを営んでいる。その後、6 年の間に業務内容は同じだが職場を 3 回替え、給料は１．６倍に増えた。若手の労働者にとって、より良い条件の職場に移っていくのはごく当たり前のことだ。そして数年後には、故郷の村に土地を買って、レンガ造りの家を建てて、結婚するが、都会の女性とは一緒になりたくないと考えている。

問４．英語の“Home”に対応するベンガル語には、父祖の出自となる土地を意味する“Bari”と、実際に生活している土地を意味する“Basha”がある。都会で生れ育った人びとであっても、自分の父祖がかつて住んでいた村のことを“Bari”と見なし、そこに現在も暮らしている親戚との交流を持ち、年に一度の祭には訪れようとする。自分が現在住んでいる場所を“Basha”のみならず“Bari”としても考えている都会の人びともいないわけではないが、多くの場合、居住している都会にある“Basha”と、父祖の村にある“Bari”という２つの“Home”を持っている。“Bari”という考え方は、若い人々、とりわけ都会へ移住した第一世代が、都会での実際的な生活様式に自身を適応させながらも、村への帰属意識を持ち続けるための助けとなってきた。だが同時に、彼らの生活様式も次第に都市化されていき、これに馴染んでいくうちに、田舎（村）での生活様式が退屈になってくる。こうして、都会から田舎へ戻り、尚且つ都会的な生活様式を持ち込んで、田舎に新しい価値を創造しようとする人も生まれてくる。一方で、都会で生まれ育ち、田舎での体験を子ども時代に持たない第二世代は、親たちから離れて都会で暮らし、生活様式も思考態度も明確で永続的な都会化へと進んでいく。以上のように、現代のバングラディシュにおける“Home”の意味は世代によって変容してきたのである。

＜出題意図＞

文学研究科の求める博士課程後期課程の学生像（アドミッション・ポリシー）「(1) 人文学に関して、自己の研究を進めるための基礎となる専門的な知識を有する者、(2) 従来の研究には見られない、高度で独創的な研究を展開する意欲を有する者、(3) 学際的・総合的な研究の構築のため、他の学問領域にも幅広い関心を持つ者」を踏まえて、本専修での学修に臨むための十分な知識と理解を有するか否かについて、解答を通して評価することを意図して出題した。